

「一粒の種をまく」

(熊本県代表)

JA 鹿本青年部 菱形支部野菜部会

伊藤 寛

(地域の紹介)

私達の暮らす植木町は、熊本県の北西部に位置し西南戦争の最大の激戦地、田原坂が有名で自然豊かな町です。平成22年、市町村合併により熊本市北区植木町となりました。

主な基幹作物は、全国生産量トップクラスを誇る西瓜をはじめ、メロン、みかん、なす等様々な果物、野菜がある施設園芸地帯です。

(活動内容)

活動として、数年毎にテーマを決めて特選西瓜・小玉西瓜・ジャンボ西瓜等の試験栽培を行ってきました。現在は、高齢によりリタイヤされた方の圃場を借りて消費者ニーズにあった、種無し西瓜を作っています。その他に、盟友や先進地の圃場を見て回る現地検討会や、作業が困難になった農家からビニール張りの依頼を受けています。また、植木スイカの一番おいしい5月のゴールデンウィークに開催される「植木町西瓜祭り I N 田原坂」にスタッフとして参加しています。今年で第6回を迎え、1万人と県内外からたくさんの方が来場し一大イベントになっています。

この様な活動を行っていますが、盟友数は年々減少しています。現在の野菜部会は10名と少なく、活動そのものがなかなか難しくなってきました。今から遡ること15年前は、30名以上と盟友も多く活気に溢れていました。活動も盛んに行われており、生産部会と連携してスイカ・アールスメロンの品種試験栽培、メディアを使った試食宣伝会などを行い、地産地消を訴え、熊日新聞社主催の農業コンクールで秀賞をとるほど活発で輝かしい時期もありました。

生産面も同様に、JA 鹿本管内でも大玉西瓜 H12年度当時964ha、H24年度現在431ha と作付け面積は、約半数減少。高齢化、重労働、コスト高、作物の転向などの理由もありますが、毎年減少傾向です。

(転機)

これから、どのように青年部活動をやっていくかと話し合っていた時に、盟友の一人が

『JA でインターン事業があるから俺たち野菜部会でやってみらんや』と提案。

「インターン事業？なんだそれ？なにをするんだ？大変そうだなあ」と思いつつ話を聞いてみるととても興味がわくものでした。

JA 農業インターン事業とは、JA グループと熊本県が研修生を募集し、JA 中央会が雇用し受入農家で1年間研修する。その後、新規就農し地域農業の担い手となり地域の活性化がおこなわれ、持続的農業がつくられるというものです。

私達は、『これだ！』『面白いんじゃない！！』

早速申込みました。すると、すぐ連絡が付き「植木町で農業をやりたい人がいます。どうですか？」ということでした。そこで面接。「以前、市場で働いていて農家と触れ合い興味がわき自分も農業をやりたい。」彼のやる気を感じ即採用。私達は、この研修生を一年後、農家として育てるべく、教育・実習期間が始まるのでした。

なぜ、研修生を受け入れたかというのにはもうひとつ理由があります。私達の仲間で、5年前に新規就農者としてアスパラガスを作りはじめた盟友がいました。自分たちは、彼がやる気も行動力もあり夢も持っていたので将来を有望視していました。それがある時、突然農業を辞めると言われた時には、ビックリ！！理由は

「これから先を考えたとき農業だけで生活していくには厳しい」とのことでした。その彼が農業をやめて一年。近所の方から、畑が荒れていると聞き見に行くと、荒れに荒れて害虫の巣となっていました。

「これは、どうにかせんといかん！」

野菜部全員が集まり、丸一日かけてようやく綺麗に整地することができました。

彼は、最後に「本当にありがとうございました」とお礼を言い、目には涙があふれていました。ここには、戻って来たくなかったはずです。一年前までは夢の場所だったのでから・・・。

私達はこの経験から、新規就農者が離農を繰り返さないためにもインターン事業に取り組み盟友全員で育てていくことを決意しました。

(研修開始)

通常は個人の農家で研修するのが一般的ですが、組織で受け入れるという前例のない初の試みです。まず始めに、一カ月ごとに各盟友の圃場を回りながら作業を覚えていく研修のサイクルを考えました。

ビニール張りや土壌消毒・キュウリの誘引作業・西瓜の収穫、たまには雑用なども行ってもらいました。ただ、私達盟友も人を教育しながら農作業していくことに、不慣れでなかなかうまくいきません。やはり、盟友も個です。仕事ひとつとっても考え方、やり方が少しずつ違います。それをどう、受け入れていいのかで戸惑った時もある

ったようです。

作業していく中で、研修生も小さな疑問をどんどん聞いてきます。例えば、

「西瓜はなんで蔓を3本にするんですか？この虫はなんですか？」

最初のうちは、何から聞いていいのかもわからなかったそうです。

『わからないのがわかってもらえない』と言われました。

質問に答えているうちに、こんなこともわからないんだと驚きました。私達は、就農してから家族と一緒にやってきて自然に覚えてきたことが、研修生にとってはどれも新鮮だったのです。改めて、自分達が恵まれていることに気付かされました。

2～3ヶ月経つころには研修生も仕事に慣れはじめ、研修中にこれからのビジョンについて話し合いました。何を栽培したらいいだろうか。反収入で金額が大きいトマトを作ってはどうか。新規のハウスを建てようと思っている。中古ハウスや空きハウスを見つけてはどうか。また、ただ単に作物を作っているだけでなくコスト高、台風に大雨・自然災害・病害虫の問題。今、最大の注目でもある TPP 問題。今おかれている農業の難しさとともに、種まきから収穫までの作物を育てる喜びや遣り甲斐も教えました。

研修後半のころには、段取りもうまくなり、一人の労働力として考えられるまでに成長していました。研修の最後には、盟友と研修生で研修期間の労をねぎらうバーベキューを行いました。その時なんと!!私達の菱形野菜部会に入りたいと言ってくれました!!「受け入れたかいがあったばい。」私達盟友も大喜び。それは、5年ぶりの入会だったからです。一粒のまいた種が芽吹いた瞬間でした。

研修生に今回のインターンで感じたことは？と聞きました

メリットとしては、

- ・一つの作物だけではなく、地域にある多様な作物を経験できる。
- ・一人ではなく大勢の意見や経験を聞くことができる。
- ・同世代だったので仲間に入りやすい。

デメリットとしては、

- ・研修期間が短すぎるため、すべての作業を体験できない。
- ・同じ作物でも個人によって栽培方法が違う。

研修期間も無事に終わり、新規就農者として本当に大きな一步を踏みだしました。苦勞していた農地の確保も、近くの耕作放棄地を借りることができ、そこにミニトマトを作付け予定だそうです。ほかのハウスには、研修中に習った小玉西瓜を作ってみ

るとのこと。私達も、これで安心と胸をなでおろしました。しかし、この時の認識が甘かったのです。

春先はどの農家も農作業が忙しく、私たちが久しぶりに研修生の西瓜を見に行くと、あの研修はなんだったのだろうと思うほどうまくいっておらず、啞然！その後、アドバイス等で何とか収穫はすることができました。

経営の主軸と考えていた、ミニトマトこそは上手くいってくれと願いました。しかし、あれほど病害虫に注意したほうがいと指導したにも関わらず病害虫の餌食。今年度は、想定していた収量よりもかなり下回る結果となってしまいました。この失敗は、研修生へのケアが足りなかったと盟友ひとりひとりが反省しなければならない事例となりました。

JA 農業インターン事業の難しさを知った私達は、熊日新聞でシリーズ企画『熊本あすの農業』の担当記者を招き勉強会を開きました。担当者の方は、熊本の様々な農家・法人を取材しておられ、新規就農者の現状や就農率など県内を取り巻く貴重な情報をお話し頂きました。

その中で、阿蘇地域の受け入れ農家の話がとても興味深いものでした。研修生の多くが、そのまま阿蘇で新規就農者として定着しているそうです。

私達はすぐに阿蘇の受け入れ農家に連絡をとり、インターンの秘訣を視察しに行くことにしました。

そこでは、「結果の出る新規就農」を目標として、園主が培った30年の「経験」「勘」を科学的根拠に基づいた数値にデータ化し栽培管理を徹底的に教えておられました。また、それだけではなく栽培に適した農地、資金、地域住民との関わりなどにおいてもサポートされており、修了生は「毎日が充実している」と農業にやりがいを感じているようでした。結果として新規就農後、阿蘇地域においてトマトでトップクラスの反収量を上げる方が何人もいるそうです。この視察は、研修生の受け入れ状況を聞くことが目的だったのですが、私たちの方が農業に対して未熟さと勉強不足を痛感させられました。

(まとめ)

インターン修了生のアンケートにより見えてくる課題は、「農業は1人では成り立たない」。それを解決するには、JAが地域の受け皿となり優良農地や農機具・資材の斡旋とともに、技術指導・安定した収入が得られる販路の支援。

行政は、青年就農給付金などの補助事業の情報、倉庫つき住居の確保により新規就

農者が定着しやすい環境作り。担い手が増えることにより、JA は購買・販売力が上がり、行政は税金の増収が見込め、過疎化・高齢化を防げます。

私達受け入れ農家としては、地域住民との繋がりや一番近い存在として内面的な支えとなり継続的なサポートをしていきます。

この、JA・行政・農家・地域が相互に連携にすることが大事です。

これから先、農家数が減少していくなかで地域農業が維持・発展していくためにもこのような取り組みが必要ではないでしょうか？

インターン事業に関わって2年。私たちは、受け入れを続け新しい仲間を増やしていきたい。地に根を張り花を咲かせ大きな果実を実らせるために。

これからも一粒の種をまく。